

令和2年度 香川県病害虫発生予察特殊報 第1号

1. 病害虫名： ツマジロクサヨトウ
学名 *Spodoptera frugiperda* (J. E. Smith)

2. 発生作物： 飼料用トウモロコシ

3. 発生地域： まんのう町

4. 発生経過

令和2年7月1日、まんのう町で栽培されている飼料用トウモロコシ圃場において、本種と疑われる幼虫の食害(写真1、2)を発見し、幼虫(写真3)を捕獲した。

農林水産省神戸植物防疫所に同定を依頼したところ、本県未発生のツマジロクサヨトウの幼虫であることが確認された。

なお、本県では、令和元年は高松市及び坂出市に設置したフェロモントラップで、令和2年は高松市、まんのう町及び小豆島町に設置しているフェロモントラップにおいて、本種雄成虫(写真4)が確認されていたが、農作物の被害及び本種幼虫の寄生については未確認であった。

5. 国内における発生状況

令和元年は7月3日に鹿児島県の飼料用トウモロコシ圃場において国内で初めて確認された後、21府県の主に飼料用トウモロコシで発生が確認されている。令和2年は、これまで西日本を中心に20県の現地圃場で幼虫の発生が確認されている。

6. 形態及び特徴

- 1) 成虫は、開張約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、雄のみ前翅中央部に黄色い斜めの斑紋を持つ(写真5)。終齢幼虫は体長約40mmで、頭部の複眼と前額の境界に見られる淡色の逆Y字状の模様及び尾部の黒色斑点が特徴である(写真6)。卵は、寄主植物に塊状に産み付けられ、雌の体毛で覆われる。
- 2) 本種は、南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯を原産とする暖地に適応した種であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することはできない。本種の分布地域は、北米～南米、アフリカ(エジプト、サハラ以南)、アジア(インド、中国、台湾、韓国、タイ、ミャンマー等)、オセアニア(オーストラリア)である。
- 3) これまでのところ、国内での報告で幼虫の寄生が確認された植物は、飼料用トウモロコシ、未成熟トウモロコシ(スイートコーン)、飼料用ソルガム、サトウキビ等の主にイネ科作物である。文献では、イネ科作物の他、アブラナ科、ウリ科、キク科、ナス科、ナデシコ科、ヒルガオ科、マメ科など広範囲の作物に寄生することが知られている。
- 4) 幼虫が植物の茎、葉、花及び果実を食害する。若齢幼虫は葉を裏側から集団で加害し、成長すると加害しながら分散する。新葉の葉鞘部を多く食害し、加害部には多量の糞が散在する。

7. 防除対策

- 1) 国内では幼虫が飼料用トウモロコシ、スイートコーン、ソルガムで多く見つかることから、これらの作物については特に圃場巡回を行い、早期発見に努める。
- 2) 本虫と疑われる幼虫を発見した場合には、速やかに病害虫防除所まで連絡する。

3) 現在、本種に対して登録のある薬剤はないが、県は、植物防疫法第29条第1項に基づき、下記のURLに示されている薬剤による散布の指導を行う。

(農林水産省「ツマジロクサヨトウに関する情報」)

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/tumajiro.html

4) 薬剤散布が困難な場合は、被害作物を早期に刈り取るとともに、幼虫の分散を防ぐため、圃場内での残渣のすき込みを行う。



写真1 飼料用トウモロコシの被害



写真2 葉鞘基部に潜り込んでいる幼虫



写真3 飼料用トウモロコシで捕獲された幼虫



写真4 フェロモントラップで誘殺された雄成虫



写真5 成虫 (左:雄, 右:雌 開長:約37mm) 農林水産省HPより



写真6 終齢幼虫（体長：約40mm）農林水産省HPより

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>